



## 情報分野の学術出版に思う —How to だけでなく, What to, Why to が必要—

池田 克夫／京都大学大学院情報学研究科

学術出版は採算に合わず壊滅状態であり、軽いハウツーものの類だけが書店に溢れている。これらは、分かりやすくもなく、操作だけで、理由や構造の説明が一切ないので、内部の論理を知りたいという好奇心は満足されない。骨のある専門書が少ないことは、技術教育に支障を来す。良い本がたくさん売れない理由には再販制度にも問題があるが、出版側だけではなく読者の側にも責任がある。内容の公開について、厳しい制約があることも問題である。知的資産の保護は重要であるが、普遍的な人類の英知の利用に関して情報社会の今後の発展のために根本的な議論をすることが必要である。

### How to だけではなく, What to, Why to が必要

かなり前から学術出版は採算に合わず危機に瀕しているといわれてきたが、昨今とうとう壊滅状態になっていることは大変嘆かわしい。学術出版の危機に対応することがKnuth氏がTeXを開発した動機であったが、TeXは電子出版の進歩を一層促進し、電子出版はついに活版印刷に取って代わった。とともに、皮肉にも今日のメディア技術の進歩をも促し今日のメディアブームの発展のお先棒を担いだ格好となった。

そして、今や“軽い”ハウツーものや絵解き読本、漫画、そして読み切りの雑誌が書店にあふれている。

xxxブック, xxxを知る, xxxシステムサービスプログラミング, xxxツールキット, in side xxxなどといったタイトルの分厚い本が20冊以上、我が家の狭い書斎の本棚にも並んでいる。これらは東京出張で時間があれば、秋葉原の電気街や東京駅の本屋で、タイトルからはいずれもとても興味を引かれる内容のように見え、つい衝動買いしたハウツーものである。いずれも分厚くて重く、指がしびれそうな思いをして雑踏の中を提げて帰ってきたものである。帰途の新幹線の中で早速拾い読みして、その後は、例外はあるものの、ほとんど参照することなく本棚の場所を塞いで、惰眠をむさぼっている。

これらを読んで虚しい思いをする

のは、マニュアルとして機能の説明も、意味不明のカタカナ語の乱用と不適切な用語の選択のために、分かりやすいとはいえないうえに、単なる操作の説明だけに終始して、なぜそのようなことになっているかの理由や構造の説明が一切ないことである。大学を卒業して以来、電子計算機の成長とともに計算機システムの周辺で過ごしてきた者としては、システムやソフトの構造や論理に大いに興味があり、少しでも中身を知りたいと思うが、その好奇心が一切満足されずに、欲求不満だけが残るような思いがする。さらには、アルゴリズムもすべてお任せであるから、本当に正しく処理されているかは容易には確かめようがなく、黙って結果を信じるしかないことも、もう1つ満足できない理由のように思う。

なぜなのであろうか。本屋さんで面白そうな本を物色しているときに、ハウツーものではなく、専門書あるいは教科書を求めたいが、最近そのような本にはなかなかお目にかかれない。早わかりxxxとか、xxxのすべて、xxxマニュアルといった類のハウツーものは大量に出ているが、骨のある専門書の出版はきわめて少ないのである。ちゃんとした本がほとんど出版されていないと思うのは筆者だけなのであろうか。著者の方々や本屋さんからは、これらの本は、狙いとする読者層が違っていて、貴方のような人を対象としていないのですよ、と言われることは分かっている。し

かし、目先のhowよりもこれからの発展を図るためにwhy, whatを論じることが大切である。でも現実には流行らない。

そのうえに、多くの本は、内容もお粗末である。英語の原著を翻訳したものも多いが、訳のお粗末さや誤りも多いように思う。それなら原書を買ったらいいのだが、やはり日本語を読む方が楽なので、結局は翻訳版を買う。そして裏切られることが多い。

もちろん、マニュアルの必要性を否定しているわけではないし、すべての本がお粗末であると言っているのではない。

情報処理学会から啓蒙書を出版しようということで、小生が委員長として情報フロンティアシリーズを企画し、共立出版に委託してすでに23巻まで出版している。対象とする読者層は、最近の技術動向を勉強しようとする開発技術者や専門課程の学生、さらには興味を持つ一般向けとして、関心を持たれている話題を選び、基本的な事項の解説を目的に、2～3時間程度でさらっと読めるようにということで、小型判で100ページそこそこの分量である。自画自賛かもしれないが、多数の筆者のご協力も得て、それぞれは内容も変化に富み大変読みやすいので、たくさん売れそうなものであるが、そうでもないらしい。

大抵の書店では、新刊は横積みにして、店頭の目に付きやすいところ



に並べてあるのだが、フロンティアシリーズをそのようにして売っている本屋さんを見たことがない。そこで、売れそうな本屋さんを持ち込んで目に付くところに横積みにして売ってもらったらどうかと提案してみたが、理工学書の専門出版社の販売ルートに入らない書店では売ってもらえないようであり、配本されている本屋さんでもそのような売り方をしてもらえないという。もう少し薄くして駅のキオスクでも売ってもらえばもっとよく売れて、一般の啓蒙にも大いに役に立つと思うのだが、いかがなものだろうか。

これには再販制度という規制のかかった本という商品にかかわる旧態依然たる商習慣・流通制度の問題があるのだという。現実社会で起きているのは、そのような習慣にはなじまない新しい情報化社会の秩序の勃興である。早急に、やり方を変えないと世界的な波に乗り遅れることは必定であろう。競争のない世界は墮落する。

情報化社会の進展のためにも、ハウツーものだけではなく、読者も出版社とともに、中身にもっともっと関心を持ってほしいと思う。

まともな内容の専門書や教科書があまりないということは、技術の教育や伝承に支障を来すことになり、将来大変なことになるかと憂うのである。

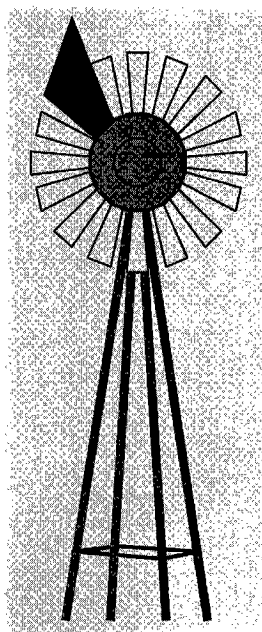
小生自身、出版の電子的な流通を促進するようなことに大にかかわってきたこともあり、電子出版が情報流通のメディアとして大きな役割を持っていることを否定するつもりはないが、論理の深い複雑な内容まですべてが電子本できちんと整理して頭に入るのだろうか。今日のメディア世代の活字離れは、明らかに活字文化の衰退を示しているように思われる。

果たしてこれでよいのであろうか。「若いうちは金を出しても苦勞を買え」という規範からすると、苦勞を避けて楽をしようとする昨今の風潮は大変な墮落である。コンピュータ世代は、リテラシーが古い人間とは

異なるのだ、という話も分からないわけでもないし、そう信じたのであるが、もう1つ釈然としないものが心の隅に残る。

これらのことは本屋さんを責めるだけでは済まない。良心的な本屋さんは今日大変な目に遭っている。明らかに、読者の側にも責任の一端が存在する。

内容の公開について、厳しい制約が課せられていることも問題である。オペレーティングシステムや言語処理プログラムなどのシステムプログラム、ユーティリティプログラム、アプリケーションプログラムの成長



期には、自分たちはこのようなソフトを作ったので使ってほしい、参考にしてほしいと、ソフトを広く公開したものである。BTLやUCBのUNIX、ETL田村氏が収集した画像処理ライブラリSpider、Stallman氏のEmacs、X-コンソーシアムのXwindowなどはその典

型的な例である。ソフトウェア科学の発展もこれらから大変大きな恩恵を受けている。Emacsを知らないソフトウェア研究者、技術者はいないであろう。ソフトウェアが著作権の対象となり、アルゴリズムが特許の対象となるなどして、これらが金儲けの対象とされるようになって以来様子がおかしくなった。本当のノウハウの公開がぱったりと止まってしまったのである。それだけではなく、リバースエンジニアリングを禁じる、などというのが利用条件となっているソフトウェアもある。特許は、知的資産を保護することもその機能の1つであるとともに、内容を公開することによって、技術の進展を促すという面を持っているが、アルゴリズムもやはり人類の普遍的な英知であり、真理として万人がそれを使うことを認められるべきものである、との考え方も根強い。Stallman氏はアルゴリズムを秘匿するという風潮に強い憤りを持ちFree Software Foundationを主宰してGNU softとして、ソフトウェアを公開している。一方で、ソフトウェア作成を仕事をしている人の生活もかかっているのに、無制限に公開することは問題であるという意見もある。

最近では、データ通信のルータのソフトを公開しているベンチャーもある。それでやっていけるのかと不思議になるが、ダントツ1社のモノポリーへの反発から、経済的な支援があって結構うまくいっているらしい。

それで思い出すことはNetScapeとInternet Explorerの戦いである。企業的な評価では、結局MS社が勝ってしまったが、過ぎたるは及ばずに如かず、同社は独占禁止法違反の嫌で司法省から訴えられていることはよくご存じのとおりである。

情報社会の今後の発展のためにどのようなポリシーや倫理コードを採るべきであろうか。ここらでもう一度根本的な議論をすることが必要であるように考える。

(2000.9.23)



## 本という生態系の危機について ーキオスクではなく、三ツ星レストランをー

松本 功／ひつじ書房

はじめまして。言語学の専門書を刊行しておりますひつじ書房の松本功と申します。このところ、学術出版というものについて考え、考えをさまざまな媒体で公開してきました。本の学校という名称の本をめぐるセミナーが鳥取の大山で行われてきましたが、それにも2度参加し、パネラになったり、指定質問者として発言したりしてきました。その際に図書館情報大学の宇陀さんと出会い、その縁で、中井さんに今回発言をということになりました。

最初に申し上げますが、ひつじ書房は文科系の人文書の出版社です。人文系は、書籍の扱いが理系とは異なっているでしょう。それは書き手の評価の一部が、単行本で行われることがあることです。理系の場合は、主に学術雑誌の論文ということになるのではないのでしょうか。人文系の場合、単行本の書き下ろしということもありますので、書籍に研究の新しい成果が出る場合もありますし、論文をいくつか書いて、後で本にまとめるということがあります。そのときには作品としてまとめるということがあります。このコーナーの読者はほとんどが理系の方だと思います。こんな違いがあるということを手頭の隅に置いておいていただけたらと思います。

さて、池田さんの発言はまったくごもっともなことで、納得のいくことばかりですが、知のエコシステムの中で骨のある専門書を生息可能にするためには、もう少し具体的な対話が必要だと思います。全体に対して意見を述べるのは難しいので、私の視点で整理させてもらったうえで申し上げることにしたいと思います。

1. ハウツーものが多く、しかも、背景にある仕組みなどを説明しない表面的な内容が多い。

2. 骨のある専門書が少ない。  
3. 啓蒙書も企画したが、内容が良いのに売れないし、書店に並ぶこともない。

まずは、3から始めましょう。

書店に並ぶことがないということですが、内容ががための書籍が、書店の経営の中核に位置づけられる書店というものはほとんどないということ、を、まず、踏まえておくべきでしょう。後で述べますが、これは書籍を経営の中心に据えることができない出版システムが背景にあるということです。

経済的な基盤は、日本の書店は、基本的に雑誌と文庫や新書、どちらかというとエンタテインメント系の書籍によって、経営が支えられているという構造になっています。これらは、販売責任を伴わない委託か、返品条件付き注文というもので書店に届けられ、取り寄せています。売り手に仕入れのリスクを負わせていません。このことにより、書店には販売上のノウハウが蓄積されないという状態になっています。目利きが育たないシステムというわけです。したがって、書店は、実質的に仕入れという行為がない状態になってしまっています。このために誰でもが読むような本を受け入れるか、あるいは一度売れたことのある内容、著者、出版社のものを入れることしかできなくなってしまいがちです。その書店にはどんなお得意さんがいて、どういう本を好んでいるか、という専門的な販売知識を養うことができないわけです。顧客層の把握と商品知識の充実という普通の小売りであれば普通に行っていると思われることが行われていないということになります。

共立出版も理系の出版社としては一流ですが、失礼な言い方になって

しまいますが、一般的に売れたという実績は頻繁にはない出版社ではないでしょうか。普通の書店では、積極的に仕入れることはできないということになります。また、主に専門書を直接読者に売っているような出版社の場合、書店で営業して、説明して、本を置いてもらうような営業部員をかかえることはかなり業務の優先順位から考えて困難です。本も、営業が重要ですから、本を紹介し、書店に届いたところに、適切に書評が出るなり、広告費をかけて、読者に届けるようなコストをかけないと、本は並びませんし、売れません。

書店の人は、知られている出版社から本が届いた場合、数日間は平積みにしますが、数日間のうちに1冊も売れなかった場合に、1冊棚ざし用に残して返品してしまうんです。65,000冊以上の書籍が年間に刊行されているということがあり、次から次と本が送られてくるので、スペースをあけざるを得ないのです。多くの書店にきちんと1週間以上置いてもらうためには、営業でしっかりその本を説明することができないといけません。全国の書店に営業することは不可能です。ポイントになる主要書店を回るのが精一杯です。数人の営業マンを一般書店のために確保することは非常に大変です。一般書を中心に刊行している中堅以上の出版社でないと難しいでしょう。

書店に目利きがないことを指摘しました。そのことが、きちんとした本が書店に並ばない重大な原因の1つですが、書店を責めることはできません。ここでは経済的な理由を述べます。もともと書籍は80がけ程度で書店に入荷しますが、これでは、リスクが多すぎます。せめて、40％程度の利幅がないと仕入れに失敗することができません。それが現実



20%ですから、4冊売っても1冊失敗したら、儲けが出ません。再販制下では、値段を下げて売ることもできませんので、責任を持って仕入れることができないのです。だから、返品が可能な方法でしか仕入れることができません。ノウハウの蓄積を必要とせず返品が可能なら、これはアルバイトでも何でもいいと書店の経営者や取次店は思いますから、専門家を雇い入れることができません。実際に知り合いの小さい出版社の社長から聞いた話だと、30過ぎの、書店にフルタイムの契約社員の給料は300万円を切っているということです。これでは、共働きするにしろ、夫婦で対等な家族としてはなりたちません（相手のヒモになってしまいます）。そういう経済状態にあるということです。目利きになろうと個人的な努力を続けている人もいますが、それがきちんと支えられる仕組みになっていないということです。

こういう状態で、専門書的な啓蒙書であってもきちんと仕入れることができるわけがありません。岩波新書とか、もともとコーナーがあるシリーズの中の1冊に入ることができれば、棚は確保されており、書店員にノウハウがなくても、店頭で並べることができ、その本が良い本であれば売れることもあるでしょう。でも、岩波新書は680円です。この値段で、きちんと目利きに基づいて仕入れる人の人件費を産むことが可能だとは思われません。岩波書店は買い切りであり、返品ができないのに、他の出版社よりも仕入値が高いくています。この値段ですから、人件費に5%かけるとして、34円です。これでは、書店員は、ただ、並べるだけの人としてしか想定されていないということです。

本が売れなくなっている原因の1つとして、老舗の出版社が、書店の現場にベテランが残れるような条件を与えてこなかったことがあるでしょう。ソムリエのいない、フランス料理の高級レストランがないように、専門の書店員がいない良い書店とい

うのはあり得ないはずなのに、酒屋の軒先の自動販売機のような扱いしかしてこなかったということでしょう。自動販売機で年代物のワインを買う人はいません。

これについての解決方法は、本の種類を2種類に分け、一般書と専門的な本にし、専門的な本については、値段を上げること、書店の取り分を最低40%まで上げるべきです。たぶん、キオスク的な書店と専門店に分かれていく必要があるのではないのでしょうか。薬が、マツモトキヨシ型の店と処方箋型の薬局に分かれたように。

ところが、出版社も中堅以上は、経営が厳しくなっており、書店の利幅を変えることも、消費者を敵に回す可能性のある値段に上げることもできない状態です。値段についてはブックオフのような新古本屋さんの影響からか、むしろ下げる方向にあり、新書の創刊ラッシュが今年初めに起こったように、新書を出せるそれなりの規模の出版社は1,000円以下の価格帯に本を集めています。業界内部には、構造改革の力はないのではないかと私は危惧しています。

ここで、私の経営するひつじ書房の場合について少し申し上げます。最近刊行した『認知言語学の発展』（坂原茂編）の場合、4,400円でした。この値段についてどう思われますでしょうか。私は、安いと思っていますが、多くの出版社は2,000円台を超える書籍の刊行を中止し、控えています。一方、この本は、2,000部ですが、全部売れて総定価で880万円です。出版社がここから受け取る利益は人件費を引くと、通常5%くらいでしょう。この本は、自社内でDTPで本を作りましたし、ひつじは直販もやっていますので、実際には15%くらい取り分はあるでしょうが、それは自分の手で作って、自前で売っているからです。中堅以上の出版社では、こういうことはできないでしょう。認知言語学の場合、読者層が数千人はいますし、内容が良ければ買ってもらいたいと思っていますが、読者が明確でない中間的な本は、誰かが

激賞でもしなければなかなか売れません。

研究書をきちんと出せるように、我々は、日本の学術出版社の中で初めて自力でホームページを作り、メールで2,000人近いお得意さんに情報を流し、場合によっては出版業界的には御法度ですが特価期間を儲けて、直販を行ったりしてきました。専門書を出すのには読者の顔が見える必要があるからです。残念ながら、書店との連動はできませんので、店頭で見るということは困難ですが、そのために、私自身も幹事となって言語学出版社フォーラムというものを作りました。おかげさまで、各地の書店でフェアを行うことができるようになりました。現在は紀伊国屋書店本店の催事場で50社のフェアを行っているところです。フェアなので期間限定というかたちではありますが、店頭で見ることができるようになる努力はしています。

読者が見えない多くの出版社は、もっと簡単に早く売れる本、評判が決まっている本、つまり、著名な著者が原著が評判のいいものの翻訳を狙います。新しい評価を問おうという要素は多くないのです。

私は、ジャンル横断的な目利き集団を育成する必要があると思っています。アメリカの場合でいえば、ニューヨークタイムズブックレビューなど非常に優れたレビュー誌が何紙もあります。また、そのレビューは詳細に渡ります。日本の新聞の書評のように少ないが、専門家に専門の分野の書評をきちんとさせないというのと違います。朝日新聞の書評欄はなぜ哲学者の木田元という優れた哲学者に、小説の紹介をさせるのでしょうか。私は、優れた目利きがいれば、横断的に本を紹介することができる、たとえば、優れた心理学の本が優れた社会学のための本であるということもあり得ますが、そういう目利きがいないとジャンルを横断したい本が、その業界の中でしか読まれないし、知的なレベルの高い

普通の人（非業界人という意味）が気がつくこともできないと思うのです。

さらに、きちんとしたレビューが、流通していれば、書店の人がそれを参考にして仕入れることができます。ガイドブック的な本ばかりではなく、きちんとした内容の本を並べることができます。アメリカの場合、日本と違って、数カ月前にはレビュー用の本を特別に作り、レビューに届けます。書籍が正式に印刷にかかる前に、評価が巷に流れるのです。書店の人もそれを指針に仕入れることができます。日本にはそういうものはありません。私はこの点では、返品可能な日本の流通の仕組みは、事前評価を必要としなかったこと、学界やジャーナリズムの世界が、そういう独創性の高く、普遍性のある本をどんどん紹介して、それを元気づけるような仕組みを作らなかったことに原因があると思っています。書評家の評価も日本ではとても低いです。この仕組みが機能していないと斬新な内容の本は世に出ることができません。

著者に予定通りに原稿をいただき、出版社も計画的に本を作り、刊行の数カ月前に見本の本を作るという（これは生半可な手間ではないと思います）手間をいとい、そういう仕組みを作ってきませんでした。再販制度と返品自由性の方が機能している時代には、楽だったので手を抜いたわけです。これでは2の「骨のある専門書」は出ようがないのです。1のように表面的なマニュアル本が隆盛することになります。

私個人は、友人たちと働きかけ合い、書評のホームページを1997年から運営してきましたのは、それは上記のそのインフラを作りたいと思っ

たからです。これは、知に対する目利きの機能を持ちたいと願ってすすめていますが、まだ実験的なサイトにとどまっています。

ここでお聞きしたいのですが、商業的な出版に、学問への関与を認めるかどうかという点です。学問は研究の中で生まれ育つのであるから、出版社はかかわらないと考えるのであれば、パブリッシュは、学問業界内の何かが、非商業的に行えばいいことになります。たとえば、学会が本を出して、あらかじめ会費をとった会員に回覧すればいいわけです。理系はそうなっているのでしょうか（会員以外に読めるようにしている理由を明示的に持っている学会はあるでしょうか）。

人文系だと出版社が研究に貢献する場合が、少ないですがあります。日本の言語研究の主流は、現代日本語の研究に対してずっと長い間価値を認めてきませんでした。評価されるまでの長い間、三上章という天才言語学者の業績は国語学会の機関誌『国語学』に載ることはありませんでしたが、くろしお出版という小さな出版社が出し続け、また、奥田康雄という超人言語学者の本はつい最近まで評価されていませんでしたが、麦書房という出版社が本を出し続けていました。両者の研究は、最近では研究者にとって常識のようなものになっています。言語学の場合、出版社は貢献をしていると思いますが、他のジャンルの場合、どうなのでしょう？

学会にはそれなりのしがらみや内部の論理があります、それらをすべて否定する必要もありませんが、違った論理で公開していく仕組みが、バイパスとして存在することが、研

究の閉塞化を防ぎ、公開するのに役に立つのであれば、その機能を認め、後押ししてほしいものです。

両者の影響を受けた研究書を最近、岩波書店から出しています。普通の人には、くろしお出版とか麦書房などは知らないでしょう。骨太な研究書を出しているのは、岩波書店ではないのです。もし、日本の社会的なシステムの中で、くろしお出版や麦書房が評価されないのなら、「骨太な研究書」が出るのを望むことは無理でしょう。

研究と出版とそれを売り買いしながら読まれていく世界は一種のエコシステムになっているのだと思います。現状に問題があるとすれば、それはどこかで皆つながっているのではないのでしょうか。今までの出版のエコシステムはもうかなり破綻を来しています。次のシステムを作るのには、痛みも伴いますし、混沌も生まれるでしょう。しかし、現在のシステムを癒すことはもう不可能だと思います。再構築しかありません。そのとき、近代の仕組み全体が、変わることになるだろうと思います。

目利きを育てること。そのための手間とコストを多くの人がいとわないこと。そのためには現状について遠慮のない対話が可能であるべきです。今回、ここに投稿させていただきましたが、このような機会がもっと増えていけば、次のシステムを産み育てていくためのプランを話し合うことが可能になるでしょう。

ひつじ書房HP <http://www.hituzi.co.jp/>

書評HP <http://www.shohyo.co.jp/>

本にまつわる対話の場所として

<http://www.bookcafe.gr.jp/>

(2000.10.8)



# 「かたい本」はどうか、どうすればよいか

山本 毅雄／図書館情報大学

池田先生の嘆きは心にしみますが、「まともな内容の専門書や教科書」の部数を、現在の流過程のままで増やすことが無理なのは、松本さんのおっしゃるとおりだと思います。

松本さんの「目利き集団の育成」も大賛成ですが、値段を上げることは有効かどうか。こういう「かたい本」は、昔の方が相対的にはずっと高かった（1カ月の給料で、たとえば30年前と現在とで、どれくらい本が買えるかを想像してみると分かる）のです。現在より対象読者の絶対数はたぶん少なかったのに、かたい本がけっこう活発に流通していたのは、そのおかげだったのでしょうか。しかし今（松本さんがおっしゃるように）かたい本の値段を上げてマージンを増やしたとしても、置いてくれる本屋の数は増えるかもしれませんが、現在以上に売れるかどうかは疑問ですね。

書評のための見本版の早期配布も、できるといいのですが、いつも執筆の大遅れする自分を省みても、またコスト低下に懸命の出版社の現状をみても、なかなか現実化は難しいように思います。

## オンライン書店とオンデマンド出版

となると、需要が地理的にも時間的にも広範囲に分散しているため、在庫やディスプレイのためのスペースコストが問題になるかたい本の流通のためには、オンライン書店とオンデマンド出版に頼るしかないのではないのでしょうか。

「本とコンピュータ」の100日議論その1「オンライン書店は本の文化を変えるか？」<sup>1)</sup>にあるように、一般書籍については地域書店との対比でいろいろな意見があるでしょう。しかしこと専門書に関するかぎり、オンライン書店にもっとがんばってもらうのが、まず第一に必要なことと思

います。

洋書については、Amazon.comをはじめとする外国のオンライン書店のおかげで、本を探したり購入したりすることが、ずっと楽になりました。おかげで私なんかも、一時より洋書をよく読むようになったと思います。和書については、上の100日議論で共同通信の松本正さんが書いておられるように<sup>2)</sup>、使い勝手はまだまだですが、次第によくなっていくと思っています。

出版社や著者としても、かたい本に関してはオンライン書店を主な販路と考えて、それに焦点を合わせた戦略が必要ではないでしょうか。たとえば、あえて再販制を選択せず、オンライン書店に対するディスカウントを最初から計算に入れるのも1つの選択肢かと思ひます。

技術面では、オンデマンド出版のコスト（特に小部数印刷・製本のコスト）をもっと下げることでも大事でしょうね。本については、いろんな思い入れもあって伝統的な形を変えることが難しいのですが、オンデマンド出版に適した本の形態と製造プロセスは、さらに研究する必要があると思います。

## 英語での出版

欧米で出る英語の専門書がどうしてああ安くできるかという話になると、必ず「世界が市場だから」といわれます。開発途上国の経済発展・情報化とともに、世界の研究者や学生の数は爆発的に大きくなっています。日本からの英語による発信も、一層努力する必要があると思います。

むかし森口繁一先生の「FORTRAN入門」は、英語で出したらきっと売れるし、国威発揚にもなるのにと残念でした。今でも、英訳すればけっこう売れそうな本があちこちに見られ

ます。

ところで理工学では（ことに国内出版社の場合）、著者自ら翻訳したものを「ネイティブチェック」してもらって出版するケースが多いようですが、本当に読んでもらおうと思えば、単に間違いを直す程度でなく、人文・社会系の書物のように、まずネイティブスピーカーが読みやすく自然な英語に翻訳したものを、さらに専門の編集者に編集してもらう必要があるように思ひます。

## 学習用図書館の充実

若い人にかたい本を読ませるには、図書館を充実させ、授業でどんどん図書館を使わせることが有効でしょう。

いま日本の大学図書館の多く（特に国立大学図書館）は、スペースでも蔵書内容でも、学生のための図書館になっていません。小学校から高校までの学校図書館も、最近文部省が力を入れているとはいものの、まだまだです。

ことに授業で本を使うためには、同じ本が何冊も置いてある（図書館用語で「複本」という）ことが必要ですが、これができている図書館はごく少数です。また、タイムリーに新しい本を入れること、そのためには使われない古い本を整理し、集中保存に回すことも必要です。

少子化や国・地方自治体の財政困難で、学校はどこもこれから大変でしょうが、次代の読者育成のためには、学生・生徒用の図書館を飛躍的に充実させることがきわめて大事だと思います。

## 参考文献

- 1) オンライン版「本とコンピュータ」100日議論その1：オンライン書店は本の文化を変えるか？  
<http://www.honco.net/100day/01/index-j.html>
- 2) 同上、松本 正「日本のオンライン書店事情」  
<http://www.honco.net/100day/01/1999-1203-matsumoto-j.html>

(2000.10.24)



## 著者－編集者の連合書籍と原点への回帰

三橋 昭和／(株)IEインスティテュート 出版局 MCR編集部

池田先生の貴重な体験に基づく学術書出版（あるいは理工書出版）に対する提言は、この業界に身を置く編集者の1人として、強い責任と反省を感じると同時に、なぜそうなってしまったのか、どのように脱却するすべ（術）があるのか、何人かの編集者との日常的な討論をもとに見解を述べてみたいと思います。特に、①「知的好奇心が満足されない」、②「内容もお粗末で、まともな（骨のある）専門書や教科書があまりない」などのリアルなご指摘は、出版の本質にもかかわることです。

一方、ひつじ書房の松本さんの出版界の流通や書店に関する鋭い分析と、①「目利きを育てる」、②「新しい流通への取り組み」などの地道な現状打開の努力は、今後の活性化に非常に重要なご意見で、共感するところが多々ありました。

このような背景を前提に、重複しないように一編集者からの体験をレポートいたします。

私は、約35年にわたって書籍と雑誌も含めて理工書出版関係の編集者を続けていますが、この間、概算25,000人以上の方々とは名刺を交換し、研究者、技術者をはじめ多岐にわたる方々のご協力をいただけてきました。担当した分野は、エネルギーの電気工学、半導体エレクトロニクス、電子工学、コンピュータの情報工学、コミュニケーションの通信工学、インターネットの情報通信工学（コンピュータ・サイエンス含む）など、めまぐるしく変遷する時代の中心的な技術の軸がシフトしていくのと同期した形で雑誌／書籍を編集してきました。

現在は、地球規模の産業革命の中で、インターネットと出版産業と教育の今後に大きな関心を寄せ、積極

的にかかわっていかうとしています。

最近では、目に見える出版物としては、石田晴久先生監修の『要点チェック式 インターネット教科書（上）／（下）』と江崎浩先生監修の『要点チェック式 インターネット用語事典』の3冊を出版したばかりの、ほやほやの株式会社IEインスティテュート（旧称（株）I&E神蔵研究所）に勤務しています。

### 出版界の悪循環

すでに、いろいろなところで指摘されているように、多くの反対の声が挙がる中で、2001年の春に公取委が出版の再販制度（定価販売）の結論を出そうとしており、出版産業は業界の大再編成も含めて、今後の動向に緊張感が溢れています。

一方、売行低迷期に入った出版産業におけるリストラクチャリングの嵐は、学術書出版／理工書出版業界にも波及し、高返品率が経営を圧迫してきています。この対策として、社員数を減らして、生産調整しながらも、その不足分は人材派遣や編集プロダクションあるいはOBに外注する方向へと進んでいます。

こうした背景の中で、新しいタイプの出版社の台頭や体質改善に成功した出版社もありますが、多くの場合、既存の出版社では、従来のような良質な出版事業を展開しにくい環境となってきています。

これは、よく出版界の悪循環といわれ、定着してしまっていることですが、「返品が戻ってくる前に、新刊を発行しなければ、返品分の資金の手当てができなくなっている」とことと深く関係してきています。このことは、現在の出版界の集中的な矛盾点の1つともなっています。「返品が返ってくる前に、新刊を発行する」

ということは、考え方によっては、ごく当り前のように聞こえますが、返品率が増大してくる、たとえば20％程度の目安をはるかに超えて40％以上の高返品率になってくると、これは「当り前」の域を脱し、「異常事態」になってしまうのです。現在が、まさにこの状態なのです。

この結果、出版社は、資金繰りのため、それが本来の出版人としての「志」ではないことは分かっている、現場の編集者にスピード出版を要請せざるを得ない状況となっているのが現実なのです。

このため、出版社によっては、極端な場合、スピード出版のため著者の原稿に「て、に、を、は」程度の朱字を入れるだけで済ませ、それ以上、原稿の内容にまで踏み込んだ編集をさせない状況も発生しています。

### 効率化とその問題点

このようなスピード出版による効率化を進めると、次のようないくつかの問題点が浮き彫りになってきます。

- 編集者にとって本来、命のように大切な著者の原稿が、単なるベルトコンベアに流れている対象物にしか見えなくなり、きわめて事務的な処理をせざるを得ない（魂を入れた編集をしようがない）。
- この結果できた本が売れようが売れまいが、編集担当者としては内容に責任があるわけでもない、あまり関心を持たない（持てない）。それよりも、次の原稿に早く取りかかって処理してしまいたいという気分になる。

まさかと思いたくなりますが、こんな状況で、自分の本が編集されるとしたら、どんな気分になるでしょうか。残念ながらこの分野では、出



版社から著者を選択することはあっても、著者から出版社のある編集者を指定する習慣はないのです。これはある断面から見たケースで、すべてがこういう状況とは言いませんが、たとえばここまでしないと返品に見合う新刊の供給が間に合わなくなってしまうのです。

残酷なことですが、このような背景が、池田先生のご指摘の「内容もお粗末」、「骨のある出版の欠如」につながっている可能性があり、また知的好奇心を満たしてくれる本が出しにくくなってきているのです。

### 著者－編集者連合書籍と、原点への回帰

いま、学術書・理工書出版に求められているのは、もう一度「原点へ回帰すること」ではないかと思います。そのための体質改善には、地道な粘り強い闘いが求められます。現実には、資金の手当てが迫り、きれいごとを言っている場合ではないことも多いのですが、前述の悪循環を断たないかぎり、明日が見えなくなってしまうのです。

そこで、平凡なことですが、私は「妥協せず、迎合せず」の編集方針を打ち立て、本作りの基本としています。簡単にいえば、著者のレベルで

良しとされる難解な部分は、できるだけ著者と折衝して読者に分かりやすくしていただく（妥協せず）、一方、読者が今要求している内容に迎合せず、もう少し先の内容まで織り込んでいただくことにしています。

これは、言うは易し、行ふは難しで、編集者の負担はかなりなものになりますが、一方多忙な著者にとって、ある局面ではわずらわしい編集者に映るかもしれません。しかし、著者と編集者が本気になってこのような連合戦線を組み、分かりやすく質の高い書籍を世に問うていくことしか、学術書出版へ読者を取り戻せる方法はないように思います。

読者の心をゆり動かし、日本の技術研究レベルの向上に、影響力を持てるような、できれば「よくぞここまでやった」と感動を伝えられるような本づくりをしたいのが、編集者としての素直な気持ちなのです。

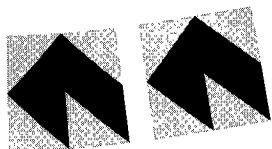
幸いにして、インターネットによって、著者の原稿レベルまでチェックできるようなWebサイトが次々に充実し、すべてとはいわないまでも国際会議の議事録が公開されるなど、机の上から世界をトレースすることも可能な時代となってきました（つまり、著者のレベルに近いオリジナル情報へのアクセスが可能となって

きた）。このようにして作られた著者－編集者の連合書籍は、インターネット上のコンテンツとして展開することによって、さらに幅広い読者を獲得できるようにすることも可能となってきているのです（ただし、インターネットの普及は、読者への情報量も増大させた結果、読者からはより質の高い内容（難しい内容ではない）のものが要求されてきていますので、先端技術の動向をそのまま伝えるだけでは、読者は満足しなくなっています）。

したがって、こういう時代になったからこそ、著者の知恵と編集者の努力を重ね合わせ、読みやすくて質の良いオリジナルな本を共同で作るという「原点への回帰」が求められているのではないのでしょうか。

最後になりましたが、池田先生が「電子出版の役割を否定するつもりはないが」と前置きされ、「論理の深い複雑な内容まですべてが電子本できちんと整理して頭に入るのだろうか」というご指摘は、今後の学術書出版のあり方に対する見識の深い問いかけだと思います。できれば、掘り下げた議論の場が必要だと思います。

(2000.10.24)



## 各氏のコメントに対するコメント

池田 克夫／京都大学大学院情報学研究科

思い切って不満をぶちまけてみたら、出版社の方々から実直なご意見をいただいた。

ひつじ書房の松本功氏は地道に学術出版の道で努力されてこられ、評価されるまで永年耐えて出版を続けられているとのこと、頭の下がる思いがした。山本先生からの貴重な提案と引用された松本正氏の報告、およびIE社の三橋氏の現状分析と提案も貴重である。

一致した認識は、日本の出版界と書店がエンタテインメント系の書籍によって支えられており、「骨のある出版の欠如」の状況である。出版界の悪循環は深刻ですぐにはどうしようもない、である。これは大変なことである。我が国の将来はどうなるのか、まったく暗い気持ちになる。どうしてこのようなことになったのか。出版社と読者が悪いというよりは、政治経済から社会の仕組み、

人々の価値観やモラルといった我が国全体におよぶ根の深い問題のような気がする。

折から、日経の一面トップ記事として始まった連載「教育を問うー学びを忘れ日本が沈む」では、漢字が消えた（若者の読み書き能力の著しい低下）；たたずみ君（意欲の喪失、目的意識の欠如）；引きこもる学校；校長を縛る鎖（公立学校の教育現場でのお役所仕事と公立校を巡る

がんじがらめの鎖), が報じられている。全部がそうではないが、大学で接する学生には、このような兆候を示す者も少なくはない。ただちに、真剣に解決策を探らないとほんとに日本は沈んでしまう、と小生も思っているし、同僚にはもっと悲観的な人もいる。

松本功氏は、現状では、書店に目利きがいずに優良な書籍を選ぶことができないこと、再販制度、書店の利幅の確保と読者の支持を得る価格設定という相反した選択、効率化のために魂を入れた編集をしていないこと、簡単に売れる本へ走り新しい価値を問おうとしない傾向、本の評価がされていないこと、などの問題点を挙げておられる。

問題を解決するには、手間とコストをいとわないこと、著者と遠慮のない対話により内容を良くしていくこと、を提案しておられる三橋氏も同様に「妥協せず、迎合せず」原点へ回帰することが必要であるとし、新しいWeb環境の積極的な利用を提案されておられる。ぜひがんばっていただきたいと願うものである。

レビューを専門家集団である学会でもっと積極的にやって学術出版の後押しをすることも学会の役割であろう。

山本先生は松本正氏のamazon.comの成功例の報告を引用しながらオンライン書店の活用を提案されている。

これは新しい読書文化の誕生である。ネットワークとWebと電子出版による新しい情報流通の仕組み、およびオンライン書店をはじめとする新しい物流の仕組みは革命といってもよい。もはやその流れを止めることはできないのである。

オンライン書店にもっとがんばってもらうのがよい。疲労した古い制度に執着しない方がよい。そして、新しいやり方にそぐわない規制の即時撤廃が望まれる。再販制度は世界的に見ても早晚破綻する。固執していれば日本で出版する必要はないから、外国に行ってしまうだけのことになるであろう。

山本先生は、国際的な視点から英語による発言の重要性、および学生のための図書館の充実の必要性も指摘された。誠にもっともである。ぜひ

ひこのような流れができることも期待したい。

いずれも思い切った施策を講じる必要がある。そして従来の秩序がすっかり変わるのである。いや、変わらねばならないのである。そのためには相当程度の痛みも覚悟せねばならない。

追伸：拙稿ではソフトウェアアルゴリズムの秘匿についても言及したが、これに関するコメントはなかった。引き続きの討論を希望する。

二伸：推敲を終えて最終稿を正に送ろうとしたときに、bit休刊のニュースがメールで飛び込んできた。歴史のある良心的な専門誌が1つ姿を消すというのである。誠に残念である。1日も早く、現代の出版事情に耐える形で復刊されることを願うものである。

(2000.10.26)



議論の続きは、次のURLをご覧ください。 <http://www.ipsj.or.jp/magazine/interessay.html>



## (社) 情報処理学会 正会員新規入会の特別キャンペーン!

社団法人 情報処理学会は今年創立40周年を迎えます。21世紀に向け、より多くの皆様にご入会いただき、本学会での活動を通じて、日々発展し続ける情報分野においてご活躍いただきますよう、正会員新規入会者の入会金免除特別キャンペーンを実施いたします。

ぜひ、この機会にご入会いただきますようお願いいたします。また、お近くに興味のある方々がおられましたら、ご紹介いただけましたら幸いです。

- ・正会員新規入会者の入会金(2,000円)免除
- ・期 間：平成12年度(2000年4月1日～2001年3月31日)

入会に関する詳しい案内はホームページ (<http://www.ipsj.or.jp/>) をご覧いただくか、照会先まで資料をご請求ください。

